
魔法と力（完成版）

fairyhunter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と力（完成版）

【Nコード】

N7875Z

【作者名】

fairyhunter

【あらすじ】

小学生時代の記憶がない魔法学校に通うレン・オルグライトの話

「使命を・・・思い・・・出せ・・・」

この声とともに俺は目をさます。この頃へんな夢を見る。それは使命を思い出せというものだ。俺の名前はレン・オルグライト。魔法学校に通っている中学二年生だ。といつても俺はなぜだか魔術が使えない。だから成績は最低クラスだ。まあ運動神経はいいけどな。そして俺はまたまたなぜだか小学生のときの記憶がない。本当に謎ばかりだ。って

レン「遅刻だああああ」

登校した瞬間に学校のチャイムになる。

レン「ふう　ギリギリセーフウ」

セツナ「おせえぜえ」

レン「寝坊しちまってよお。セツナは？」

セツナ「なめんなよお。俺はちゃんと七時におきたぜえ」

マルル「君たちは遅いでしゅ」

レン「ならマルルは何時におきたんだよお」

マルル「ぼくはでしゅねえ、もちろん六時におきたんだよお」

教室ではいつもどりの会話がなされていた。そんななか一人の生徒が呟く。

男子「今日はマーガレット先生の授業じゃねーかよお。だりい」

そう。マーガレットとは女の先生のくせに男らしい言葉を使う。

マーガレット「なんか私の噂してるか？おいおいSTの時間だろ？はやく座れよ。」

皆「ふぁーい」

これもいつもどおりだ。そしていつもどおりに学校が終わる。そしていつもどおりに家に帰る・・・と思っていた・・・が帰り道セツナがこんなことを言い出した。

セツナ「立ち入り禁止のドアいつてみたくな？」

立ち入り禁止のドアというのはこの魔法都市にあるものでそこは関係者以外立ち入り禁止だ。そこに入った関係者以外の者はもう二度と魔法都市には戻ってこれないらしい。

マルル「そうでしゅねえ。僕も行ってみたいと思ってたんでしゅよお」

セツナ「じゃあ決まりでいいよな？もちろんレンもくるよな？」

レン「あ・・・ああ、行くか」

ということであれは立ち入り禁止のドアの前に立っている。

セツナ「よし。じゃああけるぜい。」

マルル「まつでしゅ。ここっていつも鍵がかかってるんじゃないかな？たでしゅか？しかも鍵なしで開けようとした人が前怒られてたでしゅよ。」

セツナ「まつ、幸運を祈ろうぜい・・・ならあけるぜい」

マルル「OKでしゅ」

レン「分かった」

この時俺は思った。ここを開けると俺の人生が変わってしまうのではないか・・・と。

その考えが頭によぎったときセツナがドアを開けた。鍵はかかっていなかった。ドアの先には特に何も無い、たんなる平地だった。皆が安堵した時に突然遠くから轟音がなった・・・。そして前から傷を負っただれかがやってくる。

「おい　なんでお前らがここにいるんだ？さつさとかえれ。」

そいつはマーガレット先生だった。

マルル「なんで先生がここにいてるんでしゅか？」

マーガレット「話は後だ。私は今から治療をしに行く。お前達は学校の校門前にいろ。あそこを見られたからにはすべてはなさなくてはならない。いいか？」

レン「は・・・はい」

セツナ「分かったぜい」

マルル「はいでしゅ」

学校まではそう遠くない。そして俺たちはさっきのことを話し合っていた。

レン「あれはなんだったと思う？」

セツナ「あの音といい、先生の怪我といい……。なんか戦争でもしてんじゃねえの？」

マルル「この平和な魔法都市でしゅか？」

セツナ「まあ先生がすべて話すっていつてんだからここで考えなくてもいいんじゃないかあ？」

そうやって校門前でしゃべっていると、先生が来た。怪我は魔法で治したと思われるが、まだ傷は残っている。よほど大きな怪我がったのだろう。と考えてるとマーガレット先生は口を開いた。

マーガレット「今から話すことは誰にも言っな。わかったな。」

レン「はい」

マーガレット「なら今から個室に入りすべてを話そう。ついてこい。」

さっきよりも距離は短いはずなのにさっきよりも十倍近く距離が感じられた。

マーガレット「なら、何から話そうか。まずお前らはさっきのを見て何を感じた？」

マルル「戦争……。でしゅかね？」

レン「まあそうだな。」

セツナ「そうっばいぜい」

マーガレット「そうだ。あれは戦争だ。」

マルル「なんで戦争なんかしてるんでしゅか？」

マーガレット「これを話そうとすれば昔のことになるがいいか？」

セツナ「いいぜい」

マーガレット「昔この世の中……。というよりこの地球では力が人々を支配していた。そいつらは異常に身体能力が高かった。そしてその力に対抗するために魔法というものが作られた。そして今戦争をしてるってわけだ。」

セツナ「つーことはよお。この魔法都市はちつぽけな存在ってことかよお？」

マーガレット「そうだ。この魔法都市は地球のほんの一部でしかない。そしてこの戦争のことを知っているものは、魔法都市にはいない。」

マルル「えっ？でも言い換えてみればこの魔法学校は力側と対抗するために学んでいるってことでしゅよね？なら僕達の母親は知っているはずでしょ？」

マーガレット「ちよつと違うな。この魔法学校は別に戦うために作られたところではない。単なる学校だ。たぶんみんなの家族……すまんレン。」

レン「いいですよ。続けて下さい」

マーガレット「まあセツナ・クロニクルとマルル・ロータスの母親や父親は戦争に関係ない仕事だろ？」

マルル「まあ考えてみればそうでしゅね」

セツナ「そうだなあ」

マーガレット「ちなみに戦争をしている魔法側の者たちは立ち入り禁止のところで戦う訓練をしている。」

マルル「なるほどでしゅね」

マーガレット「そしてもう一つ。言っておかなければならないことがある？」

レン「なんですか？」

マルル「なんでしゅ？」

セツナ「なんだぜい？」

マーガレット「それは……あなた達にもその魔法軍学校に通ってもらう。まあもちろん入学金は免除ってことで」

レン「……えっ？」

セツナ「マジかよお」

マルル「っ……つまり……どういうことでしゅか？」

マーガレット「まあ……学校を転校しろってことだな」

衝撃だった。やはりあのドアを開けることによって俺の運命は変わってしまったのだ。

マーガレット「それと最後にお前ら三人に聞きたいことがあるんだが？」

レン「はい？」

マーガレット「お前ら・・・本当に三人だけだったか？」

レン「え・・・ええもちろん」

マーガレット「ならいいが・・・ならあれは私の見間違いか。まあいいこのことは家族には・・・というか誰にもはなすなよ。まあお前らの両親には私が伝えておこう・・・ではまた明日学校でな。残り少ない学校生活を楽しみたまえ。」

マルル「ん？残り少ないってあと何日ぐらいなんでしゅか？」

マーガレット「まあざつと二週間ぐらいかな？」

またも衝撃だった。そして俺たち三人が帰っている途中、都市全体に放送がかかった。

放送「今、魔法学校の近くで暴れている人がいます。住民はただちに自宅に避難してください。」

レン「おいおい。あぶねえな。かえろーぜ？セツナ」

セツナ「帰る？なんでだよ。俺たちは魔法軍学校に通うんだぜい。いつてみるしかないだろおがよあ。」

マルル「うーん。まあ僕はみんなに合わせるでしゅ。」

レン「まあしゃーないからいつてやるよ。」

セツナ「よし。じゃあ走るぜい」

俺たちが走っているとき、俺の頭の中では 使命を思い出せ という言葉が頭の中をこだましていた。

そんなことを考えているときに俺たちの目の前で、暴れている生徒を発見した。

セツナ「おい。何暴れてやがんだあ？」

男「あア？なんかいったかア？」

マルル「いったでしゅ。暴れるのはやめるでしゅよ。」

男「ぎヤアぎヤアうつせエなア。ん？お前は俺たちの仲間じゃねエのかア？」

誰がだ？と思つた瞬間相手が俺を指さして言つた。

男「おめエだろオがよオ。おめエは俺たち力側の人間だろオがよオ。」

衝撃だつた。ていうか今日は衝撃を受けるのが多い。

男「おいおい。使命を思い出せやアアアア」

ん？このセリフ・・・と思つたとき急に頭痛が俺を襲つた。

レン「俺は・・・いつたい何なんだ？俺は何なんだああああ」

男「そうかア。知らねえのかあ？おめエがなんでここにいるのか・

・そしてなんで小学生時代の記憶がないのか。そしてなんで魔法が使えねエつてことをよオオオオオ」

俺は何も答えることができなかった。なぜならいろいろな考えが頭の中をぐるぐるしていたからだ。

男「おいおい。何にも言えなくなつたんですかア？なら言つてやろオじゃねエかよオ。まずてめエは力側の人間なんだよオ。だから魔法が使えねエんだよオ。まアてめエはそこらへんある村のガキだつただけだなア。力側の王がお前を選んだんだよオ。そして何でてめエがここにいる理由は・・・スパイなんだよオ。いい情報はつかんだかア？」

レン「ふ・・・ふざけんなああ。俺は・・・俺は・・・魔法使いだああああ。だつてよお魔法学校に通つているし魔法都市にも住んでんじゃねえかああああ」

何を言っているんだ。と自分でも思つた。相手の意見が百パーセント正解とは言えない。だがその説明がしっくりきてしようがなかった。でも自分で力側と認めたくなかった。そう思っていると誰かが声を出した。

マルル「そんなこと関係ないでしゅ。レンは僕達の仲間でしゅ。とつかかなんであんたはここに来たんでしゅか？」

男「ああ？おめエ、ですユですユうつせーんだよオ。ここに来た理

由ウ？分かんねーのかア？馬鹿ばっかりだなア。簡単なことだろオがよオ。連れ戻しにきたんだよオ。そのレンって呼ばれてる奴をよオ。つーかよオ、おめエうぜエから殴ッていいかア？」

レン「やめろ。マルルは関係ねーだろ」

男「関係ねエだとオ？そんなの関係あるかア？俺が殴りてエツたら殴るんだよオ。分かるか？あア？」

そう言った瞬間敵がマルルに殴りかかった。だがマルルは殴られなかった。なぜならセツナがマルルをとっさの判断でタックルしたからだ。

セツナ「あぶねえなあ。大丈夫かあ？マルル？」

マルル「はいでしゅ。あいつがレンを連れて行くって言うなら僕は戦うでしゅ。僕はレンと違って魔法が使えるんでしゅよ。」

そついうとマルルは地面に魔法陣を書き始めた。というより二秒くらいで書き終わった。

マルル「冥界よりくるでしゅ。ローズ・バード！」

とマルルがいうと魔法陣からバラの大きな鳥が現れた。鳥というか竜や朱雀に近い。

マルル「いくでしゅ。ローズフェザーブレイク！」

この瞬間バラの羽が相手に向けて発射された。これはかわせないっと思った。が相手はかわしながらマルルに近づいて行った。だがマルルは動かなかった。

セツナ「マルル！なにしてやがる。はやく動きやがれ！」

マルル「う・・・まだ待つてくだしやい。」

と言った瞬間マルルは殴りとばされた。そしてマルルが書いた魔法陣からマルルが離れる（とばされた）とローズ・バードは消えていった。多分術者が離れると魔力が供給されなくなり、

地球には居られなくなるのだろう。そんなことよりマルルが殴られたときに俺はキレかかっていた。

男「おいおい。魔法都市の人間ッてのはこんなに弱えエもんなのかア？あア？クズばっかだな」

レン「・・・んな」

男「あア？しつかりしゃべれや。」

レン「・・・けんな」

男「あア？」

レン「ふざけんなつつてんだろ。俺を攻撃すんのはかまわねえ。でもなあマルルは関係ねえって何回いつたらわかるんだよおおお
お」

カツとなった俺は敵に殴りかかっていた。だが敵はひらりと俺のパンチをかわした。

男「そんな攻撃じゃ何年かかってもあたらねエぞオ」

その通りだ。と俺は思った。だがただ殴りかかること以外にはいい作戦を思いつけなかった。

男「おいおい。長考とかしてんじやなねエよオ。誰かシンキングタイムあげたかア？あア」

敵がそう言つてもなにも言い返せない。何か・・・何かいい手はないのか・・・と思っていると・・・

セツナ「俺も戦っていいかあ？」

とセツナが言った。

レン「だめだ！お前はこの戦いに関係ねえだろ」

セツナ「この戦いに関係あるなしの問題じゃねえ。俺は・・・マルルを殴ったこいつが許せねえだけだぜい。」

レン「で・・・でも」

セツナ「俺もお前もあいつを殴りてえってのは同じだろ？まあお前に何言われても、俺は戦うぜえ」

レン「お・・・おう。分かった。でも一つだけ条件があるんだが」

セツナ「なんだぜい？」

レン「まず・・・俺にあいつを殴らさせる。」

セツナ「始めからそのつもりだぜい。まあ俺もお前とは違って魔法が使えるからな。お前はただあいつに殴りかかってくれい。俺が全力で補助すんぜえ。」

レン「おう」

男「おうおう。相談は終わったかア？ならいくぜエ」

と言った瞬間に相手は俺に殴りかかった。

レン「は・・・速い」

男「おめエがおせエんだよオ」

と言われ俺は殴り飛ばされる。俺はなかなかのダメージを受けたが立ち上がれないわけではなかった。俺が立ち上がった瞬間相手に異変が起きた。

男「な・・・なんだア？これはよオ」

と、言いながらあいつは地面を蹴っている。どちらかという音を
出しているみたいだった。

セツナ「レン！あいつの後ろから殴りかかれ！」

レン「お・・・オッケー」

俺は内心 無理だろ 思っていた・・・。

レン「くらええええええ」

と言いあいつの後頭部を殴る。その瞬間相手が吹っ飛んだ。

レン「当たった！？」

おれとセツナは敵の近くに行く。もう敵は気を失っていた。

セツナ「おいおいこいつどうするう？」

レン「言ってもなあ。マーガレット先生でもよばか。」

セツナ「おう」

と話していたらマーガレット先生がきた。

マーガレット「おいおい おまえらこんなところでなにしてる！早く家に避難しろといったろーが・・・これお前らがやったのか？」

セツナ「そうだぜえ。すげえだろ。まっ 魔法軍学校に通うんだからあたりめーだな」

マーガレット「ばかやろう！」

セツナ「へ？」

と言った瞬間マーガレット先生はセツナの胸ぐらをつかむ。

マーガレット「仲間が怪我をおってんだろーが。だから避難しろと

いったのに。あとなあオルグライト」

レン「はい？」

マーガレット「後で私のところに来い」

レン「は・・・はい」

セツナ「俺はどーすればいいんだあ？」

マーガレット「お前はマルルを連れて病院に行つて来い」

セツナ「分かったぜえ。じゃーなレンまた明日会おうぜえ」

レン「おう。じゃーな」

といい俺はセツナと別れた。そして今日二回目の個室に入る。

レン「またここか」

と俺が呟いた瞬間マーガレット先生は

マーガレット「モニターを見る」

と言った。そこにはさっきの戦いが映っていた。

レン「なんですか？これ」

なんのことは分かっていたがとりあえず聞いてみた。

マーガレット「これはさっき監視カメラに映っていたものだ。」

レン「相手強かったんですよ」

マーガレット「そんなことどーでもいい。この瞬間をみる」

と言つてあるシーンを見せた。

レン「こ・・・これは・・・。」

そこには俺が力側の人間だと宣言された瞬間が映っていた。

マーガレット「おまえがスパイだったことはまだ信じられない。だがお前は魔法を使えないし、おまえが力側の人間だと疑いがかつた時点でおまえをここにはおいていけないんだよ」

レン「そ・・・それって？」

マーガレット「お前にはこの魔法都市から出て行つてもらふ。今すぐだ。」

俺はこんなに簡単に人生つてもんは変わってしまうんだな。と思つた。

それからの記憶ははつきりしていない。まあたぶんマーガレット先

生に連れられて魔法都市から出されたのだろう。立ち入り禁止区域はさつきとは違いもう轟音は鳴っていないかった。

レン「はあ。これからどうするかなあ」

それから俺は大体三時間ぐらいあるいた。とりあえず町でも探すかと思っていると・・・

女の子「ねえ。あなた誰？」

と後ろから言われた。振り返ってみるとそこには小学四年生ぐらいの女の子が木刀を持っていた。服はともファッションセンスがあるとは思えない動きやすさだけを追求したようなものだった。

レン「おいおい。女の子がそんなもん持ってたらだめだろ。」
と俺は言った。

女の子「こんなものみんな持ってるよ」

と意外な答えが返ってきた。

レン「はい？みんな？」

女の子「うん。みんな」

と女の子は言ったが、周りには人っこ一人いない。

レン「おいおい。実はそーゆーのにあこがれてるだけで誰ももってねーんじゃないの？」

女の子「も・・・持ってるもん」

レン「例えば？」

女の子「お・・・お母さんとか？」

レン「レディースじゃねーかお前の母さん！んで今もお前の母さんそれ持ってるの？」

女の子「そ・・・それは・・・。」

レン「やっぱりもってねーんじゃないの？」

女の子「今はお母さんはいないの。」

俺はしまったと思った。

レン「そ・・・それは済まない」

女の子「ううん。いいの。そのお母さんを今探してるから。」

レン「お前、名前は？」

女の子「私の名前はシオン・マーガレット」

レン「マーガレット？」

ああ先生の娘さんか。今からはあえねえなと思った。

レン「俺もお母さん探しに付き合ってやるよ」

シオン「ほ・・・ホント？」

レン「ああ」

それから俺はシオンのお母さんの話を聞いていた。

レン「お母さんはどんな感じの人？」

しているが聞いてみた。

シオン「昔は一緒に暮らしてたの。」

レン「どこで？」

シオン「ここからは遠いけどあっちのほうだよ」

といい俺が歩いてきたほうの右のほうを指差した。

レン「ふーん」

っておかしくないか？マーガレット先生は魔法側の人間だろ？魔法も使えるし・・・。

シオン「んでね。出ていくときにスパイがどーのこーの言ってたの。」

は？意味わかんねえ。もしマーガレット先生がスパイならなんで魔法が使えるんだ？・・・まさか力側の人間も魔法が使えるのか？ならなんでおれは使えない？まあまた今度考えてみるか。

レン「まあとりあえず。村でも探すか。」

シオン「うん！」

それから二時間ほど歩くと・・・

シオン「あつ。村だよ！」

レン「おおホントだ。」

シオン「ほんとだっけなによ！」

レン「すまんすまん。まあ行くぞ」

村に入ると一人の俺と同じ年くらいの男が話しかけてきた。

男「おいおい他所もんか？」

レン「誰？」

男「俺はリリイ・グランディだ。」

レン「リリイ？」

どこかで聞いたことのある名前だ。

リリイ「ん？お前誰かに似てるな。名前は？」

シオン「私の名前はシオン・マーガレット」

リリイ「お前に聞いてねーよ。お前は？」

レン「俺の名前はレン・オルグライトだ。」

リリイ「嘘・・・だろ？」

何が？と思った。

リリイ「ひっさしぶりいいいいいい。誰かに似てると思ってたんだけどレンかぁ。お前今日泊まるところあるか？」

レン「ねえけど」

リリイ「なら今日俺んち来いよ。お前もな」

シオン「ホント？ありがとう」

リリイ「まあいいってことよ。俺もいろいろ話したいしな」

レン「は？」

それから五分くらい歩くとリリイの家についた。

レン「お前一軒家かよ。いいなあ」

リリイ「そうでもねえよ。広すぎるくらいだ。」

シオン「あのお。お母さんは？」

レン「仕事か？」

リリイ「お母さん・・・いや両親は人質に取られた。」

レン&シオン「え？」

リリイ「この村の新しい村長は頭がおかしいんだよ。」

レン「その話しつかり聞かせろ。」

リリイ「お前がここにいた時の村長を覚えているか？」

レン「まずそこがよくわかんねえんだよな。」

リリイ「は？なにが？」

レン「まず俺この村知らねえんだよな。」

リリイ「何！」

レン「だーからあ。俺小学生時代の記憶がねえんだよな。」

リリイ「……。なるほどな。」

レン「何が？」

リリイ「お前は自分が何か分かってるか？」

レン「確か……。スパイだったよな。」

リリイ「それは知ってたのか。」

レン「まあいろいろあったからな」

リリイ「そ……。そうか。」

レン「んで。何かなるほどなんだよ。」

リリイ「ああ。おまえはスパイとして選ばれた。だがお前は反対した。理由は友達と遊んでいたい。というものだった。それでも王はお前が欲しかったらしいな。そこでお前の両親が人質にとられ、お前は王の所に行ったというわけだ。」

レン「そこで記憶が消されたってわけか。」

リリイ「まあそーだな。」

レン「んで村長がどうしたって？」

リリイ「ああ。忘れてた。んでお前が連れてかれてから、村長が変わったんだ。」

レン「なんで？」

リリイ「知るかよ！んでその村長は俺たちを従わせるために、とりあえず両親を人質として取った。それから……。この村を小さくしたな。」

レン「小さくとは？」

リリイ「面積を狭くしたんだ。多分狭いほうが村を治めやすいんじゃないの？」

レン「ふーん。」

リリイ「まあとりあえず風呂入ってこいよ！お前らが上がるまでには夕飯を作つてやるよ。」

レン「お前ら……。つておれシオンと入るのか？」

リリイ「え？じゃねえと」「その小学一年生一人だと怪我するぜ。」
シオン「だ・・・誰が小学一年生だ！私は中学一年生だ！中学だよ
中学！」

レン＆リリイ「はい？」

シオン「で・・・でも一緒に入ってほしいな。」

レン「何デレてんだてめえ。木刀もってちゃかわいいもんもかわいくなくなるぞ。」

シオン「う・・・うるさい！うるさい！うるさい！」

リリイ「まあ二人だ入ってくるってことでいいよな。」

レン「ま・・・まあいいぞ。」

リリイ「とりあえず適当に服置いとくぞ。残念ながら女の子の服は
ねえけどな。」

レン「あつたら引くぞ。」

リリイ「まあこの部屋出て右に曲がったらあるから。あと着てた服
は洗濯しておくから。多分明日乾かすと思うぜ。」

シオン「ありがとう。」

レン「じゃあ行くか。」

シオン「うん！」

まあ風呂の中では別になんの過ちも犯さずふっーに入った。悪かつ
たな。

レン「ふう気持ちよかったあ」

シオン「そういう言葉使わないほうがいいとおもうよ。」

レン「まさかお前に注意されるとはな。」

シオン「そ・・・その言い方はちよつと傷つくよ！」

レン「ごめんごめん。っーかこの服なんか重くないか？」

シオン「そ・・・そういえばそうよね。なんでなのかな？」

リリイ「二人とも上がったか？」

レン＆シオン「うん」

リリイ「なら早く来いよ。飯できたぞ。」

小走りでリビングまで行くとテーブルの上には魚の塩焼きはお米な

ど一般家庭で今日はこれよと母が言ったときに息子が、え？となるぐらいシヨボかった。

レン「こーいうときはシチューと決まっているもんだと思っていたのだが。」

シオン「でもこれおいしいよ。」

そういつた瞬間に俺がシオンの方を見ると魚を一匹丸呑みしていた。レン「な・・・何してんだおめー突っ込みどころが多すぎんだろ。」

リリイ「まあいいっていいって。俺たちも早く食おうぜ。」

俺は夕飯を食べているときに服のことを聞いた。

レン「なんかさあ。この服重くね？」

リリイ「ああ。それが。俺はもう慣れちまったんだけどよ、なんか村長がこれからはこの服を着ろって言ってさあ着てんだわ。」

レン「なんでまた。」

リリイ「知つてたら言うぞ。まあ生地をみると鉄かなんか練りこまれてない？」

鉄は練りこむものなのか？と思った。

シオン「まあまあまあ。トレーニングと思ったらいいんじゃないの？」

レン「なるほどなあ。まあいつか。」

リリイ「そんなことより、お前の昔の話聞きたくないか？」

聞きたくない！と即答したつもりだったのにそれより先にシオンがシオン「聞きたい！」

と言いやがった。

リリイ「こいつさあ昔好きな女の子にさあ」

シオン「うんうん」

そことき話したことを書くつもりはない。というかオレ自身は考え事をしていたからあまり覚えていない。というか自分の知らない過去を話されるのはいい気分ではない。まあ考え事は何かというと、俺の両親も同じところで人質として取られているのではないか？というのだ。そのことを夕飯が終わってからリリイに聞いてみた。

レン「お前の両親のところに俺の両親もいんのかな？」

リリイ「知らねえよそんなこと。まあ今日は早く寝ろよ。」

レン「おう。」

リリイ「お前らは同じ部屋でいいよな。」

レン「もう。どうでもよくなってきたわ。」

シオン「ど・・・どうでもよくないわよ！」

リリイ「まあいいだろ。じゃな。」

レン「お・・・おう。」

シオン「ちょ・・・待ちなさいねえ。ねえ！」

レン「あきらめな。」

シオン「あんたは何にも思わないの？年ごろの男女が同じ部屋で寝るのよ！」

レン「お前に限って・・・それはない。」

シオン「な・・・何よそれ！どういう意味？」

レン「どういう意味？っていわれても言った通りだよ。」

シオン「むう。」

レン「まあ布団も用意されてることだし。寝るぞ。」

シオン「う・・・うん。」

おれが布団に入ってシオンも入ったことを確認してから・・・

レン「んじゃもう消すぞ。」

シオン「うん。」

消灯をしてもすぐに眠れなかった。疲れているはずなのに今日はいろいろありすぎて頭の中がぐちゃぐちゃになっていった。俺はもう魔法都市に帰れねえんだなと思った。頭の中で気持ち整理された瞬間何故か涙がでてきた。涙を拭こうとしたとき俺の手ではないものが俺の涙拭いた。驚いた瞬間・・・いや驚く前に

シオン「なんで泣いてるの？」

マジでびびった。なんで？って思った。なんかシオンが俺の布団に潜り込んでいた。

シオン「私なんかじゃ頼りないかもしれないけど、思っていること

は口に出した方がいいよ。」

レン「大きなお世話だ。」

と言ったつもりだったがすっかりいえてなかったらしい。シオンは微笑んでいた・・・と思う。顔が見れなかったからな。

レン「な・・・泣いてなんかねえし。」

シオン「ふーん。そっか。」

少し笑いが混じってやがった。ぶっ飛ばすぞ!と思ったがまあいいか。

シオン「レン君は一人じゃないよ。私とリリイがいるよ。ね?」

レン「誰が一人だと言った。」

シオン「そんなこといってえ。私のことギュっとしてるくせにい。大丈夫!私はどこにも行かないよ」

まじか!と思った。そーいやあいつの間にかこいつを抱いてるな。いやいやそういう意味じゃなくてよお。

レン「ね・・・寝るぞ!」

シオン「元気・・・出た?」

レン「びっくりするぐらいにな。」

シオン「んじゃ。おやすみ。」

レン「いやいやいや。自分の布団に戻れ。」

シオン「すーすー。」

レン「こ・・・こいつ。狸寝入りしてやがる。まあいいか。」

そっからはマジで寝た。なんにもなかったぞ。マジで。

シオン「あさだよ!」

パツと目が覚める。

レン「今何時?」

シオン「九時だよ。」

レン「そ・・・そうか。リリイは起きてんのか?」

シオン「まだ私も起きたばかりだよ。」

レン「分かった。顔でも洗ってくる。」

シオン「うん!」

俺は洗面台に向かった。顔を洗っている途中に少し考え事？をしていた。

レン「シオンのやつ。いらん気遣いを……。昨日のことをなかったように振る舞いやがって。まあそれがあいつなりのやさしさなのかねえ？」

と俺は呟く。

レン「すまんすまん。なら朝飯でも食いにいこか。」

シオン「食べに行くって言ってもリビングに行くだけじゃないの！」

レン「ゆ・・・許せ」

シオン「まあ。行くわよ」

二人でリビングに行くとテーブルにはトーストが二枚と目玉焼きが二枚置いてあった。

シオン「あれ？リリイは？」

と言ったとき後ろから

リリイ「タベはお楽しみでしたか？」

と聞こえた。俺がすぐさまつつこもつとしたとき

シオン「うん！」

と言った。なんで？と思った。

リリイ「マジか！おいしい。」

そらそうだろう。もしやっぱりなとか言われるとたまったもんじゃねえ。

リリイ「とられたぜ。お前には負けたぜ！」

たまったもんだった。まじパネエっす。

レン「シオン。飯食うぞ。」

リリイ「照れちゃってえ。またまたあ。」

シオン「照れちゃだめだよあ。」

レン「し・・・しばくぞ！」

シオン「さっさ。ご飯食べよ？」

レン「言われなくても食うぞ！」

飯を食っているときにリリイが俺に尋ねる。

リリイ「今日はどうするつもりだ？」

レン「今日はつつつても昨日は何もしてねえぞ。」

リリイ「ナニも？」

レン「死にさらせ。」

シオン「簡単に死とか言っちゃだめだよ！」

年下に注意されてしまった。

レン「んでどうする？」

シオン「んーっとねえ。とりあえずこの辺をぶらぶらしてみたい。」

レン「観光に来たんじゃねえんだぞ。」

ん？でもこのデータを取るのにはいいか。

レン「まあいつしよに行つてやるよ。リリイも一緒に来るか？とい

うよりかは一緒に来てくれた方が楽なんだが。」

リリイ「ああ。洗濯物とかいろいろと終わらせねえといけねえから

やめとくわ。」

レン「一人暮らしも大変なんだなあ。」

リリイ「二人も居候が増えたからな。」

レン「一晩だけだろーが。」

シオン「今のはすまんとか言うタイミングだよ。」

リリイ「そーだそーだ。」

レン「う・・・うるせえ。さっさと飯食うぞ。」

シオン「うん！」

俺は朝飯を食いながら考え事をする。さっきから何を考えているかというと、この村・・・いやこの国の治め方についてだ。たとえば俺の国？というか魔法都市では王が市民に無理なことを言っただけで、もしもの時は魔法で国を鎮めることだって可能だ。ただ・・・この村だったらどうだろうか？村長が無理なことを言っているから反乱ぐらいはあるんじゃないの？多分この村を小さくしてコソコソできなくしても、一致団結したら勝てるんじゃないの？ならなんでこの村の人間は反乱しない？

レン「リリイ。この村の人間は反乱とかしねえのか？」

リリイ「そっぴゃあそんなこと考えもなかったな。」
「なんだ？」

リリイ「でも噂なんだけどよ。村長を攻撃しようとしたら、人質が
守るんだとよ。」

レン「ふーん。」

心でも操られてんのか？と思った。まあいいか。そんなことをして
いるうちに昼飯は食い終わる。

レン「シオン行くぞ！」

シオン「うん！」

レン「リリイ。昼飯までには戻ってくるよ。」

リリイ「おう。」

村に出てもあまりない殺風景の村だ。なんか日本語がおかしくなっ
たが雰囲気は分かってもらえただろうか？まあちょこちよこ家があ
るぐらいだ。

レン「観光出来るところがねえな。」

シオン「あつ。公園だよ！」

そんなことでテンションを上げるな！と思ったがまあいいか。

レン「行ってみるか。」

シオン「うん！」

公園に行ってみると小さな子供がまあまあ遊んでいた。だが大人は
一人も見当たらない。というかこの村でまだ大人に会っていない
だが……。

シオン「私あの中であそんできていい？」

レン「勝手にしろ。」

シオン「ぶう。遊びたいくせにい。」

レン「やかましい！」

それから推理の続きをする。

人質を守るってことは人質はあっちでいい思いをしてるってことか
？絶対忠誠？……ああ。子どもに手を出すぞおみたいな感じか？
・・いやいやいや。反乱してきたってことは自分が助かるかもしれ

ねえんだぞ？むしろ大人も反乱に参加すべきでは？ならどうやって村を治めるんだ？疑問は増えるばかりだ。そんなことを考えているとシオンが話しかけてきた。

シオン「さっきさあ子ども達にきいてみたんだけど、やっぱりみんな両親が人質に取られたんだって？」

レン「な・・・なんてこと聞いてんだ！ばかか？おめー。失礼過ぎんだよ！おまえ親がない気持ちじゃかってんだろ！」

と言いながらもナイス！と心のなかでつぶやいてしまった。

シオン「ご・・・ごめんなさい。」

レン「まあいい。んなことよりこれからどうする？」

シオン「どうするって言っても遊ぶけど？」

レン「分かった。俺はちよつと違うところに行ってくるわ。」

シオン「違うところ？」

レン「村長のところにな・・・。」

シオン「私も行く！」

レン「だめだ。危なすぎる。」

シオン「分かった。」

そういうとシオンは遊んでいたグループに戻った。やっぱり村長のとこにいくのが一番近道だろうと思った。それから五分ほど歩くと、こんな残念な村には似つかない大きな体育館みたいな建物があった。大体村の中央あたりだろう。たぶんここだろうと思った。入口らしきところに近づくと警備員みたいなやつが二人いた。そりゃそうか。さあてどーすっかなあ。と思いつながら草むらに隠れるが・・・。

警備員「おい。そこにいるのは誰だ？」

ば・・・ばれたああと思った。

シオン「そこを通してよ。」

お前かよ！と思った。

警備員「お嬢ちゃん。さつさと帰りな。痛い目見るよ。」

シオン「それはそっちなんだよ。」

警備員「そんなの木刀一本では僕達には勝てないよ。」

と言いい警備員が近づく。助けに行くか！と思つた瞬間シオンが木刀を相手の顔面に振り当てた。

警備員「いったいなあ。僕も手荒なまねはしたくなかつただけだなあ。」

と言つて警備員がシオンめがけて突進する。がシオンはそれをひらりとかわし。相手の後ろの首に木刀を振る。

警備員「かはっ」

と言つて、警備員が倒れた。気絶したのだろうか？するともう一人の警備員が拳銃を取り出した。これはやべえな。とおもつたがシオンは警備員に近づいていく。あいつ・・・拳銃を知らないのか？と思つた。その時パンツと銃声が響いた。え？と思つたがそれをシオンはかわしまたも警備員は木刀の餌食になつた。

シオン「もう一人草むらに隠れてるでしょ？出てきなさい。」

レン「俺だよ俺。」

シオン「アーホントダー」

レン「知つてただろ。てめー。」

シオン「まあね。」

レン「つつつてもこれからはあんな危険なマネすんなよ。」

シオン「心配してくれるんだ？」

レン「う・・・うるせえ」

シオン「まあいこ！」

と言つた瞬間入り口から男が出てくる。

男「おいおい。銃声鳴らしたから出てきたらこんなガキ二人かよ。」

こいつ村長か？

シオン「ガキつて言うな！」

男「ガキじゃねーか。まあとりあえず入れよ。」

入つてみるとやっぱり体育館そのものだった。村長のイメージが崩れた。村長つてのはわらの家に住んでおじいちゃんというイメージがあつた。そして体育館の奥の方には大人がいっぱいいた。つか全員寝ていた。多分人質だろう。

男「なんでおめえらはここに来た？」

シオン「村長をぶっ飛ばすためだよ。」

男「ほあ。言うねえ。俺をなめてはいけねえぜ。」

やはりこいつが村長だった。

村長「ならまずは女からぶっ殺すか。」

シオン「やれるもんならやってみなさい。」

しまったなあ。拳銃うばったときやよかった。ってそんな場合じゃねえ。まあシオンはつええから大丈夫だろう。と思ったんだが。まずはシオンが相手に近づき木刀を上から振り落とす。がそれを横にかわしそのまま右腕で村長はボディブローを繰り出した。シオンは壁までぶっ飛んだ。と書こうと思ったのだが、全然飛ばなかった。村長・・・力ないなあ。と思った。シオンも余裕の表情だった。ただどわざと痛がるふりをしていた。

村長「おいおい。もう終わりか？」

と言った瞬間シオンは木刀を村長にめがけて投げた。終わったなと思った瞬間、村長の前に人質が現れた。と言うよりはすごいスピードで引つ張られてきた。そして人質に木刀が当たる。

村長「今のはびびったぞ。」

ビビったのはこっちだバカヤロー。なんかいろいろおかしいだろ。と思っていると。村長がスキアリツみたいな感じでシオンに殴りかかった。かわせるなと思ったが、シオンはその拳にあたりに行くような形で殴られた。そのまま壁までぶっ飛んだ。なぜだ？と思った。村長「次はお前だな。」

レン「ま・・・待て待て待て。別に戦うつつもりはない。と言いたいがホントは戦おうとしていた。でも戦う気が失せたよ。あんた名前は何？」

村長「アンタっていうな。俺の名はマグネス・ブライトだ。」

レン「分かった。んじゃシオン帰るぞ！」

シオン「う・・・うん。」

レン「んじゃ。そういうことで。」

そこから俺たちは全速力で体育館を出た。

村長「いやいやいや。帰らすわけねーだろ。」

と言ったつばいが、そんなこと知るかばーか。

それから俺たちは体育館の周りを調べることにした。すると穴が一つあった。こんなもの開いていたかな？と思ったが多分大人が隠していたのだろう。脱出用の穴かな？と思った。

レン「帰るか！」

シオン「うん。」

それからおれはシオンとさっきのことを話していた。

レン「ホントに人質が村長を守りに来たな。」

シオン「う・・・うん」

レン「まあそのことじゃなくて俺はお前にいろいろ聞きたいんだが。」

「

シオン「私も言いたいことがあるんだけど。」

レン「さっきのことですか？」

シオン「うん。」

レン「なら今から俺が聞くことと同じことだと思うから質問に答えてくれないか？」

シオン「分かった。」

レン「まず一つ目に、おまえ痛かったか？」

シオン「んーっと。全然痛く無かったよ。なんか同じ人間なのに全然強くなかった。」

レン「分かった。次になんで拳に当たりにいった？んでなんで飛ばされた？」

シオン「それかあ。なんか引つ張られたんだよ。んでなんか飛ばされた？」

レン「なるほどな。まあ無事でよかった。まあとりあえずかえろか。昼飯食おうぜ。」

シオン「うん！」

それからダッシュで家に帰るとリリイが焼きそばを作っていた。

リリイ「おおお帰り。もうちょっとで出来るから部屋で待つといて。」

シオン「うん！」

それから俺たち二人は部屋に戻った。シオンはこの家を探検するとか言つて、部屋を出て行つた。そこでまたも推理を始めた。体育館に仕掛けがあつたのか？でもなにかスイッチを押したわけでもないだろ？しかも今さっききたばかりのシオンも食らつただろ？シオンにはなにか仕掛けをされたか？……。ボディブローのときか？いやいやいや。シオンのお腹に何かついてたわけじゃねーだろ。なら……。来る前に仕掛けられた？どうやって？と考えているうちにシオンが本を一冊もつてきた。なぜかシオンの服には釘が何本かついていた。

シオン「ねえねえねえ。この本すごくくない？」

レン「まず、おまえなんで釘つけてんだ？」

シオン「ああ。道具箱ひっくり返したからかなあ？まあそんなことよりこれ見てよ」

その本の題名を見てびっくりした。そこには「魔法と力」と書いてあつた。

レン「ちよつとそれ読ませろ。」

目次を見たら「魔法と力の関係」と言うものがあつた。何？力側の人間が魔法について知っているのか？そのページにはこう書いてあつた。

「力側の人間は運動神経が高い。何故か？それは魔力を知らず知らずのうちに使っているからだ。そして魔法都市の人間はその魔力を使つて魔法を使っている。すなわち運動神経が高くない力側の人間は魔法が使えるということだ。」

な……。なるほど。それなら説明がつく。何がかというとこの村……。いやこの国の治め方だ。それは王や村長が魔法使いだということ。これですべて説明がつく。そしてさっきのこと……。でもなんでもここにこの本があるんだ？とりあえずリリイに聞いてみるか。

リリイ「おーい。ご飯出来たぞ。降りてこーい。」

シオン「いこつ。」

レン「分かった。」

リビングに行き俺たちは焼きそばを食べた。おれはさっきのことをリリイに聞いてみた。

レン「おまえこの本しってるか？」

とさっきの本を見せた。

リリイ「しらねえよ。」

レン「ならいい。お前の両親と俺の両親は仲がよかったか？」

リリイ「ああ。すっげー仲よかったぜ。」

なるほど。これですべて説明がつく。なんでこの本がこの家にあるのか。なぜ俺がスパイに選ばれたのか、そしてこの村長がやったことの意味がな……。

レン「リリイ、シオン。ちょっと頼みごととしてもいいか？」

リリイ「おう」

シオン「うん！」

レン「明日……村長を倒そうと思う。」

リリイ「はい？」

シオン「おおおお」

リリイ「ど……どうやって？」

レン「いまから作戦を伝える。まずは明日リリイはこの村の子どもを全員村から出してくれないか？」

リリイ「いいけどなんでだよ。」

レン「なんでもだ。次に、人質も外に出してくれ。というかこれは今日の夜にしてほしい。というか子どもを外に出すのも夜中がいい。」

リリイ「なんでだよ。」

レン「村長が寝たところを狙うんだよ。」

リリイ「わ……分かった。」

レン「子どもは寝ちまうから今から打ち合わせしに行くぞ。」

リリイ「つか人質はどうやって助けるんだよ。」

レン「人質は脱出用の穴を壁にあけてるんだよ。多分今日ぐらいであくと思う。」

リリイ「ならほっとけばいいじゃねえか。」

レン「だめだ。それだとだめなんだよ。」

リリイ「理由は？」

レン「言えない。」

リリイ「何でだ？」

魔法についてお前が知っちゃったらお前も戦争に参加せざるおえなくなるだろーが。

レン「信じてくれないか？」

リリイ「しょうがねえな。」

レン「あと俺は夜徹夜すつから寝とくわ。」

リリイ「なんで？」

レン「ちよつとな。」

リリイ「じゃあみんなに伝えてくるわ。シオンちゃんはどうする？」

シオン「私はレンと一緒にいるよ。」

リリイ「むう。分かった。じゃあ行ってくる。」

リリイが家を出てから俺はシオンに話しかけた。

レン「おまえ、村長ぶん殴りたいか？」

シオン「もちろん！」

レン「ならお前も徹夜しろ。」

シオン「なんで？」

レン「明日の朝、あいつが目を覚ましたらバトルスタートだ。」

シオン「う・・・うん。」

レン「んじゃ。ねるか」

シオン「レンの布団はいつていい？」

レン「勝手にしろ。」

シオン「勝手にするね。」

といってまたも入ってきた。もうなれた。寝よう。

リリイ「おきろお。夜飯だぞお。」

俺とシオンははっ目を覚ました。夜飯はシチューだった。

レン「何で今日なんだよ！」

リリイ「まあいいじゃねえか。」

レン「んで。話をついたか？」

リリイ「おう」

レン「んじゃあ。避難させたらおまえもそこにいてくれ。」

リリイ「わ・・・分かった。」

レン「あと服乾いてるか？」

リリイ「おう。なら夕飯のあと風呂入ってこいよ。風呂場に置いとくぜ。」

レン「分かった。」

シオン「早くご飯食べようよ。」

レン「そーだな。ではいただきます。」

シチューは結構うまかった。うまいなとシオンと話しているとリリイが俺に尋ねてきた。

リリイ「なんでおれやみんなは村から出ないといけねえんだよ？」

と・・・当然の質問だな。でもどうする？どうやって答えようか。

レン「まあ簡単に言えばもう一回人質になっちまうんだよ」

リリイ「なんで？」

レン「それを知ったらお前ら露出狂になるぜ。」

リリイ「なんでだよ！」

シオン「まあまあまあ。ご飯の時ぐらいおちっこーよ。」

リリイ「シオンちゃんが言うなら許す。そーだそーだ。シオンちゃん。」

シオン「ん？」

リリイ「今日は俺といっしょに風呂にはいらな」

シオン「レンと入る！」

リリイ「くっ。やられたぜ。一緒に入ってきたな。」

飯が終わり俺たちは風呂に入った。今日も何事もなく終わってよか

ったよかった。風呂からでるとき俺はシオンに言った。

レン「この村の服は絶対着るなよ。」

シオン「な・・・何で？」

レン「何でもだ。」

それから俺たち二人は部屋に戻りみんなが村を出るまで待った。と言うよりかは三時ぐらいまで待った。それまでこれからの作戦を伝えた。それからかなり暇だった。そして三時になった。

レン「いくか！」

シオン「もう待ちくたびれたよ。」

レン「木刀持ったか？」

シオン「うん！」

そして俺たちは決戦の地体育館に行った。中に入ると寝ている村長しかいなくて人質は外に逃げていた。

レン「よし！ならシオンはその辺に隠れておいてくれ。」

それから三時間ぐらい待つと村長の目覚まし時計が鳴った。村長は目を覚ます。目を覚ました瞬間村長の顔が青ざめた。

村長「人質が・・・いない？」

ようやく気付いたかカスが！と思った。

レン「どうですか？いい目覚めでしょ。一人つてのは。」

村長「お前がやったのか？」

レン「びみょーなとこですね。実際の所人質が穴あけてたんでね。」

村長「ふーん。無駄なことを。」

レン「それが無駄じゃないんですよ。」

村長「無駄じゃない？」

レン「あなたの効果の範囲外に彼らがいますからね。」

村長「なんだと？」

レン「俺さあ。初めから疑問に思ってたんだよなあ。なんで村を小さくしたのかってさ。」

村長「それは見張るためだ。」

レン「人質の行動もろくに見張れないのに？」

村長「くっ」

レン「そしてなんでこの体育館が村中央にあるか。なんで村人の着る服を変えさせたか。その服になんで鉄の釘がくっついたか。なんで寝ている人質が村長を守ったか。なんで村長が肉弾戦に弱いのか。なんでシオンがふつとばされたのか。その理由は。」

村長「理由は？」

レン「あなたが磁力を操る魔法使いでその範囲がこの村全体だからだ。服には細かい磁石でも練りこんでたんだろ？」

村長「何でそのことが分かった。魔法使いなんて知らないだろ！」

レン「俺はもともとこの村に住んでいて、スパイとして魔法都市に行かされたんだよ。」

村長「もしかして・・・あのガキか！」

レン「そりやどーも。そして俺はこの町に偶然帰ってきた。そして昔友達だったというやつの家である本を見つけたんだ。」

村長「ある本？」

レン「その本の名は『魔法と力』だ。」

村長「何！」

レン「多分この本はおれの母さんがなかなかやばいところから盗んだんだろう。だから俺をスパイとして雇い、よ両親を人質にしたんだろう。でもその本は友達の母さんの所にいつてんだよ。」

村長「ふーん。でもな。そんなことごちゃごちゃ言っただけ、結局服きてりゃあ俺にはかてねえよ。」

レン「この服さあ。この村のもんじゃねえぜ。」

村長「何！」

レン「あと・・・後ろにも注意しとけよ。」

そういつて村長が振り返った瞬間

シオン「くらえええええええ！」

といって村長の頭に一発ぶちかました。村長はそっこで気絶した。俺は村長を負ぶって村の外に出た。

リリイ「おおおおお。どうやって倒したんだよー！」

レン「まあちよつとな。まあこいつはここにおいて俺たちはもう行くわ。あとはお前からでなんとかしろよ。」

リリィ「お・・・おう。」

レン「シオン！行くか？」

シオン「うん！」

そういつて俺たちは歩き出した。

シオン「なんでお母さんに会いにいなかったの？」

レン「ああ。俺は一人で生きてきた人間だからな。」

シオン「なんか今のレンの顔、悲しそうだった。」

レン「気のせいだよ。それより今からどこいく？」

シオン「んーっと。ここから近いし私の村に招待するよ！」

レン「うっし。分かった。道案内頼むぜ。」

シオン「うん！」

それからおれはシオンの後をついていった。

(後書き)

なんか最後の方はねむたかってぐっちゃぐちゃになってもたwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7875z/>

魔法と力（完成版）

2011年12月25日12時51分発行